

グリーン・ツーリズムの利用者特性および教育効果に関する計量分析

—北海道農村部における農家キャンプ、修学旅行受入を事例に—

澤内 大輔

北海道におけるグリーン・ツーリズム 2 事例について、供給および需要の両側面からの分析結果を報告した。

第 1 に、農業体験をとり入れた修学旅行（以下、農業体験型修学旅行）を対象に、取組実態を明らかにするとともに、農業体験型修学旅行が有する教育効果の解明を試みた。第 2 に、農家の庭先でのキャンプ（以下、農家キャンプ）を対象に、取組実態の解明および農家キャンプ利用者の特性の解明を試みた。

第 1 の事例とした農業体験型修学旅行は北海道中央部の X 地域で実施されたものであり、九州の公立高校の生徒が 2 泊 3 日をファームイン（農家民宿）で過ごした。ファームイン滞在中、生徒は農家とのコミュニケーションをとりつつ、ジャガイモ掘り、牛の世話などの農業体験を実施した。近年、農業体験や農村滞在は教育の面からも注目されており、本報告では、農業体験型修学旅行が有する教育効果に焦点を当てた分析結果を提示した。第 2 の事例とした農家キャンプは、農家の庭先にキャンプ客を宿泊させる取組であり、北海道内 3 カ所（調査時点）で実施されていた。農家キャンプは、ヨーロッパなどで比較的多くみられる宿泊形態だが、日本においては新たな取組といえ、日本における農家キャンプの実態や利用者の評価を明らかにした研究は見られなかった。

農業体験型修学旅行の取組について、農家側は、農業体験や食事時間中の会話などを通じて、農業や食料に対する生徒の関心を高めるように努める様子が窺えた。それに対して生徒側は、農業体験や農家との交流を楽しんでいる様子が窺えた。こ

の点に関しては、修学旅行生に対するアンケート結果における「事前に期待していた以上に農業体験型修学旅行を楽しんだ」との評価からも確認される。

農業体験型修学旅行の教育効果について、生徒自身による自己評価および言語連想法を用いた客観評価などに関するアンケート調査を実施した。分析の結果、自己評価では「自然とのつながりの側面」「社会生活にかかわる側面」での効果が見られたものの、客観評価では知識・理解の向上は確認されない点が明らかになった。

農家キャンプの取組について、調査事例では、すでに整備されていたトイレや水場などを利用することで、農家キャンプを始める際の投資額が抑えられていた点、協力団体による予約・受付や宣伝などの業務代行により農家の追加的な労働負担が軽減されていた点が明らかになった。さらに、農家は取組開始前には、農場が荒らされてしまうのではないかと、などといったキャンプ客のマナーに関する不安を抱いていた。

農家キャンプ利用者の特性について、アンケート分析により明らかにした。アンケートでは、通常のキャンプでの行動や農家キャンプの評価などの他に、農場の保全に深くかかわる論点である自然資源の保全に対する態度も尋ねた。事例とした農家キャンプは開始まもない事業であったため、アンケートの規模は限られていたものの、以下の点が示された。農家キャンプ利用者の特性として、キャンプ経験が豊富で新しい形態のキャンプに対する興味が強いであろう点、自然資源の保全を重視しているであろう点が明らかになった。さらに、農家キャンプに対して、解放感が得られる点を高く評価しており、また利用したいという再訪の意向を持つ者が多かった。

本研究は、農業体験型修学旅行が有する教育効果の解明や新たな取組である農家キャンプの実態解明に向けての一次的な接近である。今後は分析方法の改良も含め、さらなる研究蓄積が必要であると考えられる。